

木曾山林資料館所蔵のカラフト林業写真

資料館スタッフ 中畑孝史

1. はじめに

木曾山林資料館の所蔵する多くの古い写真のなかに、戦前の樺太^{からふと}における林業や風俗の写真（登録名はカラフト林業写真）が保管されているが、当該写真に係る説明の記載や添付された資料も無く、所蔵された経緯も不明なことから、現在まで画像によってその内容を推測するしか無かった。

著者が絵葉書を収集して調べる過程で同じ画像の絵葉書を見つけ、絵葉書に印刷された題名と説明を手がかりにして、カラフト林業写真の内容を調べ、併せて木曾山林学校と樺太の関係、樺太林業の状況及び所蔵された経緯等を解明した。

2. 木曾山林学校と樺太の関係

樺太は、北海道宗谷岬の北方約 43km 先の南北約 948km、東西の幅最大約 160km の細長い島で、面積は約 76,400 km²で北海道より若干小さい（図1）。この樺太位置図は、国土地理院の地理院地図（電子国土Web）を基にして作成した。

日本は日露戦争後の明治 38 年(1905)日露講和条約（ポーツマス条約）によって、ロシア領であった樺太の南半分（北緯 50 度以南）を領有したが、昭和 20 年（1945）ソ連軍が南樺太へ侵攻し、多くの日本人は内地へ引き揚げ、樺太全土をソ連が統治することになった。日本が南樺太を領有してからは、移住が増加し終戦直前昭和 20 年(1945)の人口は約 40 万人となったが、日露による統治が始まる以前から、ウィルタ、サハリンアイヌなどの先住民族が住んでいた。

戦前の樺太における主な産業は、農林、漁業、製紙、石炭の採掘などで南樺太の中心都市は、樺太庁（樺太を管轄した地方行政官庁）の置かれた豊原市（現ユジノサハリンスク）だった。

樺太は降雨量が少ないが、森林に恵まれているため、森林資源を利用した木材パルプの生産が盛んで、河川の水量も多く、洪水にもなりにくいことから、木材の運搬に河川が利用された。



図1 樺太位置図

木曾山林学校は、林業技術者育成のため明治 34 年(1945)に開校して多くの人材を輩出したが、木曾山林学校卒業生で昭和 13 年(1938)11 月における樺太在住者は、60 名で、その主な職種は王子製紙会社 32 名、林務署等の官公庁 17 名、日本人絹パルプ会社 3 名と、その多くが木材パルプ事業に従事した。地域別では、泊居支庁内 18 名、豊原支庁内 10 名、敷香支庁内 9 名で、やはり木材パルプの事業地に集中した。特に、昭和 12 年(1937)卒業生 44 名の内 9 名 (20%) が、樺太を就業の場とするなど関係が深かった。

木曾山林学校の開校以来、学校の教材とするため林業関係の資料収集を推奨したことで、卒業生より国内各地・樺太・朝鮮などの貴重な資料が多く集まることになったが、このカラフト林業写真も卒業生の寄贈品と考えられていた。

3. カラフト林業写真

カラフト林業写真(以下、カラフト写真)は、総数 14 枚で、白黒印画紙(はがきサイズ、10.6cm×14.8cm)、折れ・破れ・剥離の破損があり、現在は資料館整理用の台紙に貼られ保管されている。写真裏面を見ることが出来ないが、整理用台紙の説明書きによれば、写真 6 枚の裏面に発行元と思われるスタンプの押印があることになっている。印画紙は、写真台紙から剥がされたもので無く、印画紙の状態で学校に所蔵されたと考えている。

札幌市中央図書館デジタルライブラリーで公開されている樺太絵葉書約 2 千枚やインターネットオークションの樺太絵葉書の画像を検索して、カラフト写真と同じ画像の絵葉書 8 枚と類似した絵葉書 3 枚を見つけた。なお、同じ画像の絵葉書でも、題名と説明に相違があったことから、その点も留意して検索した。

カラフト写真の内容に基づき日露国境標 2 枚、林内状況 3 枚、伐木・運材状況 5 枚、先住民族他 4 枚に区分し、カラフト写真と絵葉書を対比して解説する。カラフト写真に題名が無いことから、資料館の整理番号(以下、番号)をカラフト写真の題名とし、写真と区別するため絵葉書と表記して、絵葉書の題名は略称とした。絵葉書に記載されている当時の地名と各写真の撮影場所を関連付けるために、戦前に発行された樺太産業絵葉書^{*1}より抜粋した樺太地図を掲載する(図 2)。

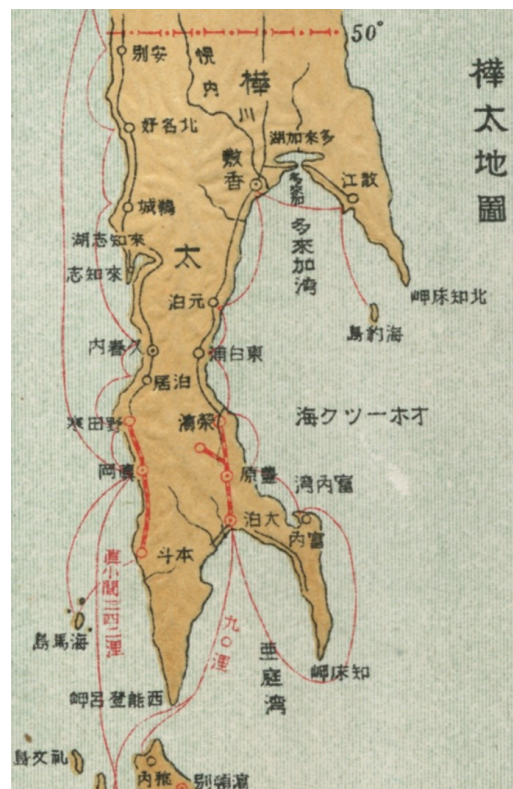


図 2 樺太地図

(1) 日露国境標

樺太北緯 50 度以南の日本領有により、明治 39 年(1906)から明治 41 年(1908)にかけて天文測量による日露両国の国境画定作業が行われた。東のオホーツク海沿岸から西の間宮海峡側までの、約 132Km の間に 4 基の天測境界標、17 ヶ所の中間標石、19 ヶ所の木標を建てたが、カラフト写真番号 10・9 は、この天測境界標を撮影した写真である。国境画定作業の時に、国境全線の森林を幅 10m で伐開が行われ、この時の様子は、明治 39 年 12 月 15 日刊行『大日本山林会報第 289 号』の「樺太境界確定談」に詳しく掲載されている。

①カラフト写真番号 10

カラフト写真番号 10 (写真 1) と絵葉書「南北樺太を二分する 50 度線上にかがやく日本帝国国境標 半田より約 4 km」敷香町半澤写真館発行 (絵葉書 1) は、同じ国境標を撮影している。なお、半田 (半田沢) は、敷香町内の地名である。

この国境標は、天測境界標の第 3 号であり、標石の南面に、菊の紋章と「大日本帝国」、「境界」の文字、北面に、ロシア帝国の双頭鷲紋章とキリル文字で「РОССИЯ」(ロシア)、「1906」、「ГРАНИЦА」(グラニツェア；国境)、側面に番号と年号の文字が刻されていた。

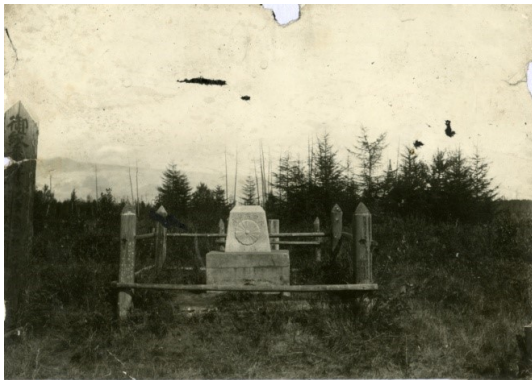
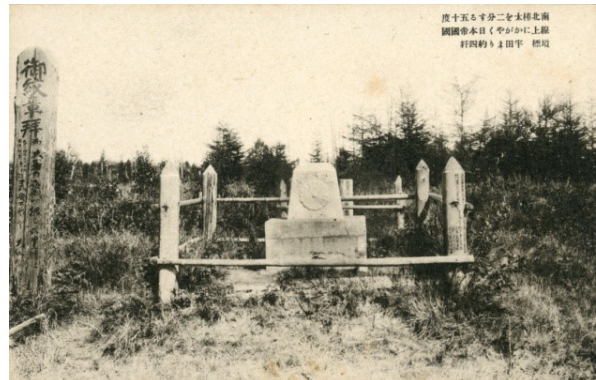


写真 1 カラフト写真番号 10



絵葉書 1 天測境界標の第 3 号

標石左の木柱に大きく「御紋章拝」のとおり、連絡船と島内鉄道の整備により観光も推奨され、樺太国境標石の見学旅行が行われた。北原白秋は、大正 14 年(1925)に船で国境周辺などを巡り、樺太旅行の紀行文『フレップ・トリップ』を執筆し、その際に国境標石を訪れた時の様子を引用する。なお、フレップ・トリップは、ツンドラ地帯の灌木 (赤い実、黒い実) から名付けられた。

太い丸太の無雑作な二坪ばかりの周囲の柵があった。その柵は朽ちかけて、既に外皮のところどころはボロボロにくずれかけていた。その中に日本と露西亜との境界標石が厳然と立っているのだ。正方形の台座に据えられた鼠いろのその標石は高さは二尺にも満たないであろう。北面に鷲、南面に菊の御紋章が浮彫りにしてあった。私は露西亜領の^{いたどり}虎杖の^{くさむら}草叢にもはいつて見た。

②カラフト写真番号9

カラフト写真番号9は、画像中央の伐開カ所の上に、矢印を後から書き加え伐開線を示している（写真2）。絵葉書「国境標天第一号（東海岸遠内海岸より約250米(メートル)の点）より西方を望むと北緯50度の伐開線が見える」敷香町半澤写真館発行（絵葉書2）。国境標石は柵の陰に隠れているが、中央にある国境標石を側面側から撮影し、画像の中央伐開線から左側が日本領、右側がロシア領である。現在の天測境界標（国境標石）は、撤去されて一部が博物館等で展示されている。



写真2 カラフト写真番号9



絵葉書2 天測境界標の第1号

(2) 林内状況

戦前における樺太の林野面積は約290万haで全土の80%を占めたが、森林面積は約165万haと46%にとどまり、エゾマツ、トドマツを主とする原生林であった。樺太南部は、開発と開拓に伴い伐採が早くより進み、パルプ工場の建設（大正3年(1914)以降）、大正8～12年(1919～1923)のカラフトマツカレハの虫被害、山火事等によって、幼齡林・不良林分が占めていた。

伐採量は、領有以来徐々に増加傾向となり、明治期では約56万m³を超えることがなかったが、大正期に入りパルプ工場開設に伴い急激に増加し、大正8年(1919)からの虫害木処分も重なって、昭和元年(1926)は約535万m³に達した。

エゾマツ、トドマツの丸太は、製紙、人絹（現在名レーヨン、木材パルプのセルロースを再生した繊維）のパルプ原料となって、樺太内の工場で加工されるか、または丸太の状態で内地の工場に運ばれた。敷香と恵須取^{えすとり}の二つの地域で全樺太出材量の半数を占めた。

カラフト写真番号2・3・11の3枚は林内状況の写真で、針葉樹林の林内にシダ類とサルオガセ、稚樹、積雪状況を撮影しているが、同一及び類似する絵葉書が見つからず、題名、撮影場所、撮影の目的が不明だが、関係文献を調査する過程で類似した写真を見つけた。

カラフト写真番号2（写真3）と同じような構図の写真が、九州帝國大學の『樺太演習林に於ける植物生態調査』に、「ヤマドリゼンマイを生じエゾマツ・トドマツにサルヲガセを懸けたる林相」の説明を附して掲載され、カラフト写真番号3

(写真4)は、『樺太林業史』掲載の九州帝國大學樺太演習林(以下、九大演習林)択伐更新地写真に酷似している。大正2年(1913)に設置された樺太の九大演習林は、敷香町に位置し面積約2万haを有していた。カラフト写真番号11(写真5)に関する手がかりは見つかっていない。



写真3 カラフト写真番号2



写真4 カラフト写真番号3



写真5 カラフト写真番号11

(3) 伐木・運材状況

樺太では、冬期積雪を利用して造材及び流送地点までの山出しを通例とし、春から秋にかけて河川で流送が行われた。カラフト写真番号12・4・13・5・14の5枚が該当し、造材から流送までの作業の工程順に並べた。積雪でトドマツ、エゾマツ等の稚樹が埋まることで、伐出作業時の損傷が軽減されること、山火事のリスクを避けること及び伐出作業が夏山に比べて容易である事が理由にあるが、伐出労働者は島内よりも、北海道や東北地方からの季節労働者が大半であったことによる。もともと樺太に林業労働者は存在せず、他地域から渡ってきた労務者・技術者が林業先進地の伐木・運材の技術や方法を樺太に適応させ発展した。

敷香町は、日本の領有下における南樺太北部の中心都市の一つで、町の北端は日露国境に接し、敷香のツンドラ地帯を流れる幌内川は、全長は320kmの大河で、その源流は北緯50度以北の北樺太に発し、多来加(現テルペニア)湾に注いでいる。敷香における出材は、その大部分が幌内川の沿岸であり、樺太で最も出材量が多かった。

①カラフト写真番号 12

カラフト写真番号 12 (写真 6) と類似する絵葉書「冬の造材」(絵葉書 3)。冬期の伐採現場における伐木作業中の様子であり、立木は伐木・玉切・節打・皮剥の順に造材されたが、降雪時は伐倒前に根元の雪堀作業が加わった。



写真 6 カラフト写真番号 12



絵葉書 3 冬の造材

②カラフト写真番号 4

カラフト写真番号 4 (写真 7) と類似する絵葉書「樺太事業地雪出状況」創立 30 周年記念秋田木材株式会社発行(絵葉書 4)。冬期中に丸太は、伐採現場から川沿いの土場へ馬^{そり}轎運材され、桧積み(丸太を並列に積み上げる)した。多くの馬夫(馬搬人夫)は付近の農民で、冬期に馬を伴って搬出に従事した。他に馬曳き・人轎・犬轎の山出しが行われていたが、昭和 2 年(1927)頃よりトラクターを導入した機械化も図られ、伐採量が増加したことで夏山作業も行われるようになった。



写真 7 カラフト写真番号 4

下：馬轎の拡大



絵葉書 4 雪出状況

下：馬轎の拡大

③カラフト写真番号 13

カラフト写真番号 13 (写真 8) と同一の絵葉書「樺太の宝庫木材の山積」、「豊富なる森林に恵たる敷香地造材の土場」(絵葉書 5)。撮影場所は敷香の土場で、春季の融雪水を待って、桎積みされた丸太を川の流れに投入し散流(管流し・バラ流し)により流送したが、この場所では、馬を使役して丸太を投入している。



写真 8 カラフト写真番号 13



絵葉書 5 春季の敷香土場

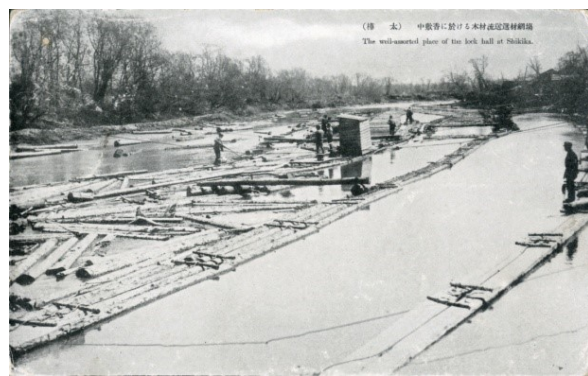
流送は、本流の場合に直接流れを利用して材を投入するが、支流や小沢の場合は、鉄砲堰を利用し堰に十分な湛水が行われると放水を開始し、同時に丸太がその水量と水勢によって支流や小沢を、散流しながら本流へと流下した。

④カラフト写真番号 5

カラフト写真番号 5 (写真 9) と同一の絵葉書「中敷香に於ける木材流送選材網場」(絵葉書 6)。敷香の幌内川選木^あ網場で、流れてきた材が網場に到着すると、流送夫が材を陸揚げと編筏に選別した。陸揚げに、同じ材種や同じ長さごとに仕分け桎積みされ、その後鉄道で島内の木材パルプ工場へ運ばれた。筏は曳航されて、沖で船積みされた材は、内地の各港へ運ばれた。



写真 9 カラフト写真番号 5



絵葉書 6 幌内川の選木網場

⑤カラフト写真番号 14

カラフト写真番号 14 (写真 10) と同じ絵葉書「幌内川に於ける木材の洪水」(絵葉書 7)。同一画像が、昭和 11 年 6 月 15 日発行の市河三禄著『林業経済地理』に、「幌内川網場に到着したる樺太材(敷香半澤氏撮影)」として掲載されている。カラフト写真番号 5 (写真 9) と同じ網場を写したものか定かではない。



写真 10 カラフト写真番号 14



絵葉書 7 選木網場の流材

(4) 先住民族他

ウィルタは、狩猟や漁労、^{となかい}馴鹿遊牧を営む民族であり、一定の地域内を馴鹿と共に移動しながら生活し、日露による統治以後も国境を越えて移動し、自らはウィルタと称し、日本人からはオロッコと呼ばれ、カラフト写真番号 7・6・8 が関連する。大正時代後半に樺太庁の政策により敷香支庁郊外のオタスに集住し、昭和 16 年(1941)の樺太庁の調査によると敷香周辺には 278 人のウィルタが居た。

樺太では、拓殖地や伐採跡地に末木枝条が大量に累積し、半枯状態の落葉や枯枝が厚く堆積していたこともあって、わずかな残り火から容易に発火し拡大した。樺太庁は山火事の予防に腐心し対策を講じたが、樺太の山火事根絶は至難の業で、カラフト写真番号 15 が該当する。

①カラフト写真番号 7

カラフト写真番号 7 (写真 11) と類似する絵葉書「奥地の造材に要する物資を運搬すべく凍結した幌内河上に集まった馴鹿橇」(絵葉書 8)。馴鹿は、敷香周辺に多く家畜として飼育され、冬期は馴鹿の橇で雪原を移動し、冬の物資輸送や移動に欠かせなかった。このカラフト写真の馴鹿橇の周囲から広範囲にわたる立枯木は、カラフトマツカレハなどの虫被害によるものと推測している。



写真 11 カラフト写真番号 7



絵葉書 8 馴鹿の橇

②カラフト写真番号 6

カラフト写真番号 6 (写真 12) と同一の絵葉書「樺太の土人風俗 敷香町郊外オタスの杜を訪ねてオロッコ族の家族と其小屋」(絵葉書 9)。オタスのウィルタ族の家族とその住居で、後方の棚でサケの肉を干して冬期間の食料とした。ウィ

ルタの伝統的な住居は、比較的細い木の幹の柱を何本も組んで、外部を毛皮で覆った円錐形の天幕式の住居である。



写真 12 カラフト写真番号 6



絵葉書 9 ウィルタの家族と住居

③カラフト写真番号 8

カラフト写真番号 8 (写真 13) と氷上の魚釣り写真を組み合わせ着色した絵葉書「冬の樺太・土人のスキー」(絵葉書 10)。樺太アイヌが冬期の歩行用具として用いた歩くスキーが、「ストー」と呼ばれ、スキーの原型とも云われた。厳冬の多雪な状況下において、歩行での移動に欠くことのできない歩行用具であり、幅広の薄い木の板の両端は尖って少し上方に反り、その裏の全面にアザラシの毛皮を張っていた(写真 13-1)。



写真 13 カラフト写真番号 8



絵葉書 10 冬のスキー



写真 13-1 カラフト写真番号 8 のストー拡大
(木の板の形状と張られたアザラシの毛皮を確認できる)

④カラフト写真番号 15

カラフト写真番号 15 (写真 14) と同一の絵葉書「毎年巨万の大森林を焼く樺太名物山火事」、「巨万の富も一朝にして灰に化し此世に山の地獄と言はれる樺太の大山火は、全山火となり風を呼んで紅蓮の焰は天を焦す凄状言語に絶する」(絵葉書 11)。樺太の山火事は、ひとたび発生すると、またたく間に数キロメートル離れた森林に飛火をくりかえ



写真 14 カラフト写真番号 15



絵葉書 11 山火事

し、幾日となく火勢の衰えを見せず猛威を振るった。山火事は樺太名物とも言われ、雪解けが終り、日の光がまぶしくなる頃に頻発し、原因は開墾地の火入れ、煙草の吸殻、機関車の火の粉等だった。『樺太林業史』で樺太の山火事として引用されるなど広く知られた写真である。

(5) カラフト写真のまとめ

前述のカラフト写真 14 枚の他に、もう 1 枚が樺太の写真として登録されていたが、中部森林管理局に同じ画像のガラス乾板が保管されていることから、この写真の撮影主は帝室林野局、撮影場所は木曾地方と推測したことから、本報告から除外することにした。^{*2}

絵葉書 1～11 は、明治 40 年(1907)頃から昭和 20 年(1945)までの発行及び使用済み絵葉書 1 枚に大正 6 年(1917)の消印があったことから、カラフト写真の多くは、大正期から昭和 7 年(1932)頃までに敷香周辺で撮影され、地元の商店で土産品として発売されたと推測している(図 3)。絵葉書発行元の敷香半澤写真館と幌内川網場に到着した樺太材を撮影した敷香半澤氏は、同一人物なのか、カラフト写真の敷香半中澤商店と関係するのか、不明である。

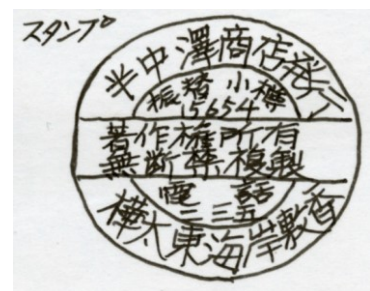


図 3 スタンプ写し

4. カラフト写真と木曾山林学校

カラフト写真が木曾山林学校に所蔵された経緯の記録は、これまで確認されていなかったが、昭和 8 年(1933)の学校創立 30 周年標品記念金受付簿(木曾山林資料館所蔵)に「昭和 8 年 4 月 15 日樺太森林写真 10 葉(24 回卒)松沢正」の記録を見つけることが出来たが、この樺太森林写真の仕様、内容等は不明である。

樺太の木材パルプ増産に対応するための人材確保が必要であったことで、即戦

力となる多くの木曾山林学校卒業生が樺太へ渡ったと考えている。

カラフト写真の撮影地の敷香には、昭和13年に9名が在住し、王子製紙木材会社3名、日本人絹パルプ会社3名、秋田木材会社1名、敷香林務署1名、九大演習林1名だった。

樺太森林写真を寄贈した松沢正は、当時敷香に在住し九大演習林に勤務していたこと、及びカラフト写真2・3が九大演習林に関係した写真と推測できることから、松沢正がこのカラフト写真の寄贈者と考えている。なお、現在の所蔵枚数と受付簿枚数に相違があり、この点が疑問として残っている。

5. おわりに

戦前の樺太に関連した絵葉書は多数発行され、その中に樺太の林業絵葉書が存在している。樺太の林業絵葉書を検索する過程で、数多くの樺太絵葉書を閲覧することになり、戦前の樺太における歴史の一端を見ることが出来た。

一部に不明な点が残されたが、木曾山林資料館に所蔵されていたカラフト写真の内容及び寄贈の経緯が判明したことで、カラフト写真の評価が高まることと考えている。さらに、このカラフト写真は、絵葉書以上に鮮明な画像であることから、貴重な樺太の歴史史料であると考えられる。

註

*1 樺太産業絵葉書（写真は樺太庁）



*2 カラフト林業写真から除外した写真



降雪期における運材状況の写真で、運材器具の形状から「雪橇」と推測する。大正の頃に、小谷狩に代わる橇運材が導入され、木曾での冬期事業が始まり、雪橇運材が主流の秋田、青森から人材を募集した。

大正9年木曾御料林提要参照

参考文献

市河三禄（1936）林業経済地理

樺太林業史編纂会編（1960）樺太林業史

王子製紙山林事業史編集委員会編集（1976）王子製紙山林事業史

九州帝國大學農學部附属演習林（1931）．演習林報告第一號

木曾山林学校（1938）卒業生名簿昭和13年11月現在

中浦皓至（2001）日本スキーの発祥前史についての文献的研究．北海道大学大学院教育学研究科紀要 84. P87

上西勝也（2009）史跡と標石で辿る日本の測量史